DATA

データで見る産婦人科医の実態

産婦人科専門医試験受験者を対象に行ったリクルートアンケート結果
(2020年)

<概要>
・2020 年度日本産科婦人科学会産婦人科専門医試験受験者 327 人を対象にオンラインアンケートを実施した。
・回収率は 89.3% (292/327)であった。

<目的>
産婦人科専攻医数は近年増加しているがその割合は緩徐であり、2024 年に医師の働き方改革が開始されることを考えれば更なる人員確保が必要である。一方で医学生や初期臨床研修医の勤務先、専門診療科に求める要素も年々変化していることから、産婦人科志望に影響する因子の探索は重要である。本アンケートでは産婦人科専攻を決定することに寄与した因子、およびこれまで施行したリクルートイベントを評価することを目的とした。

<調査期間>
2020 年 9 月 23 日～10 月 22 日

<対象者>
2020 年度日本産科婦人科学会産婦人科専門医試験受験者

<方法>
オンラインアンケート*

*2020 年はコロナウイルス蔓延による影響で専門医試験が都道府県単位になったため、オンラインでアンケートを実施した。受験者へリマインドメールや、各種リクルートイベントのチューター経由でアンケートへの回答を依頼した。

<回収率>
89.3% (292/327)

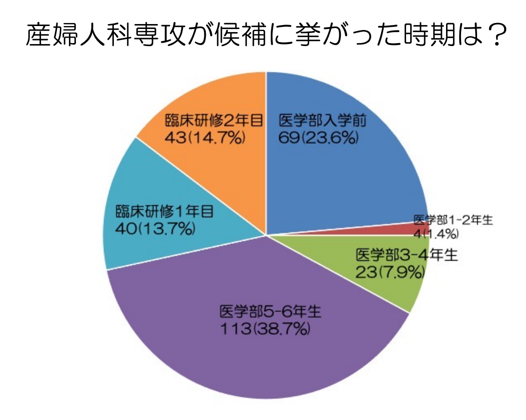
A　背景情報

項目名	N (%) (総回答数：292)
性別	
男	127 (43.5)
女	163 (55.8)
無回答	2 (0.7)
結婚の有無	
未婚	160 (45.2)
既婚	132 (54.8)
子の有無	
なし	191(65.4)
あり	85 (29.1)
妊娠中	16 (5.5)
家族・親戚中の産婦人科	
いない	240 (82.2)
両親	40 (13.7)
祖父母	13 (4.5)
兄弟姉妹	9 (3.1)
その他	11 (3.8)
臨床研修病院の種別	
市中病院	193 (66.1)
大学病院	60 (20.5)
たすきがけ	29 (13.4)

男女比ではわずかに女性が多かった。専門医の段階で子供のいる者は30%程度であり、約5%が妊娠中であった。
家族・親戚中の産婦人科医がいない者が約８割と多数であった。
初期臨床研修病院としては約2/3が市中病院を選んでいた。

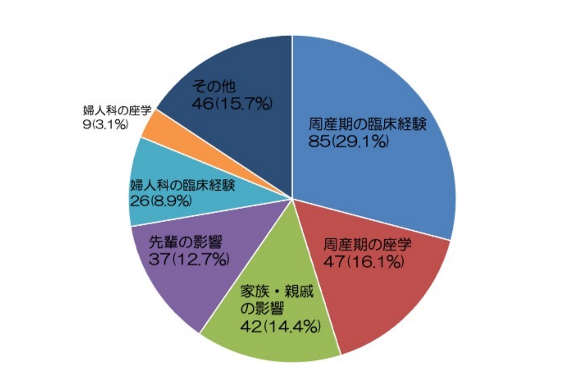
B　産婦人科専攻が候補に上がった時期・理由

産婦人科専攻が候補に挙がった時期は？



医学部5-6年生が最も多く全体の38.7%を占めていた。
臨床研修中に産婦人科専攻が候補に挙がった割合は28.4%程度であった。
医学部入学前、４年生までに産婦人科専攻が候補に挙がった割合は32.9%と全体の1/3を占めていた。

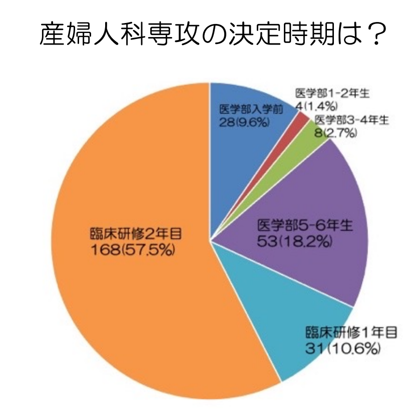
産婦人科専攻が候補に挙がったきっかけは？



周産期の臨床経験・座学が合計45.2%と高く、次に家族・親戚・先輩の影響が合計27.1%、
婦人科の臨床経験・座学が合計12.0%を占めていた。

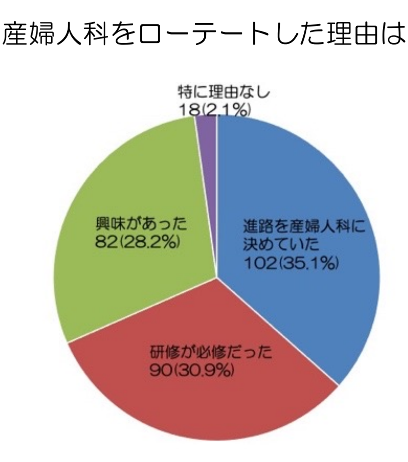
C　産婦人科専攻を決定した時期、決定に寄与した理由

産婦人科専攻の決定時期は？



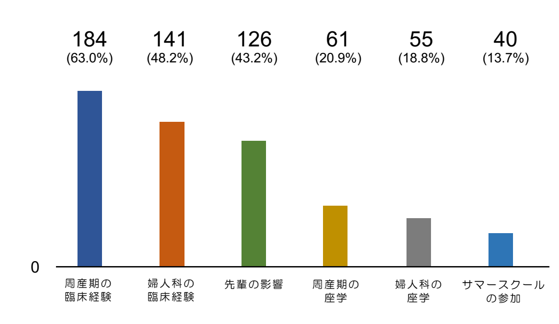
産婦人科専攻を決定した時期は半数以上(57.5%)が臨床研修２年目であり、
次いで医学部5-6年生(18.2%)、臨床研修１年目(10.6%)の順に多かった。
医学部４年生までに専攻決定に至っている者は少なかった。

産婦人科をローテートした理由は？



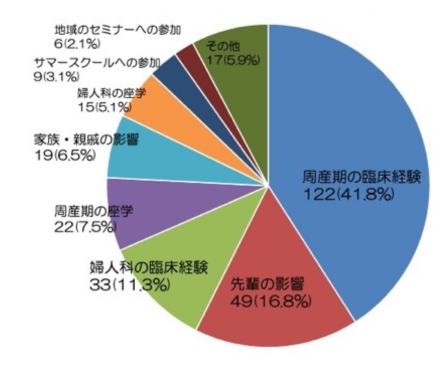
産婦人科をローテートした理由として当初から進路を産婦人科に決めていた者が35%と最も多く、興味があったと答えた者と合わせて63%を占めた。一方研修に必要であったと答えた者も30%ほどおり、初期臨床研修必修化による影響がうかがわれた。

産婦人科専攻に寄与した理由は（複数選択可）？



産婦人科専攻に寄与した理由は周産期(63.0%)・婦人科(48.2%)の臨床経験が多く、次いで先輩の影響を挙げる者も多かった。(43.2%)
産婦人科サマースクールを理由として挙げた者は13.7%いた。

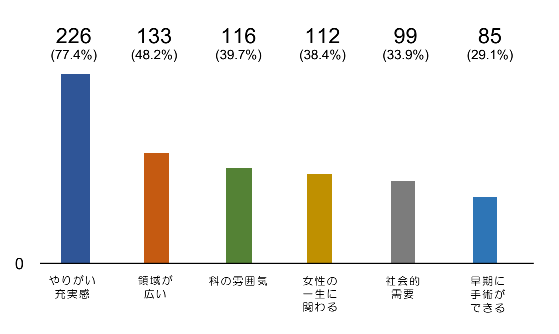
産婦人科専攻に最も寄与した理由は（1つのみ選択）？



産婦人科専攻に最も寄与した理由としては周産期の臨床経験が多く(41.8%)、
先輩の影響(16.8%)、婦人科の臨床経験(11.3%)がその後に続いた。
産婦人科サマースクール(3.1%)、地域のセミナー(2.1%)への参加を挙げた者もいた。

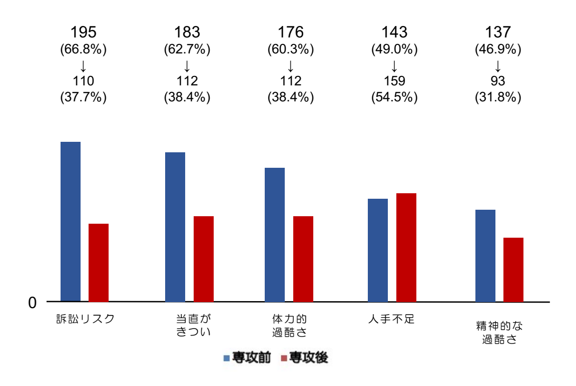
D　産婦人科の魅力・不安

産婦人科の魅力は（複数選択可）？



産婦人科の魅力としてはやりがい・充実度を挙げる者が最も多く（77.4%）、
領域が広い(48.2%)、科の雰囲気(39.7%)、女性の一生に関わる(38.4%)、社会的需要(33.9%)、
早期に手術ができる(29.1%)など様々な理由が選ばれていた。

産婦人科専攻の前に不安に感じていた点は？
+
専攻後にこれらの不安は変化したがか？



産婦人科専攻の前に不安に感じていた点として訴訟リスク(66.8%)、当直のきつさ(62.7%)、
体力的(60.3%)・精神的な過酷さ(46.9%)や人手不足(49.0%)が挙がった。
専攻後、人手不足を除き多くの不安が低減していた。

＜考察＞
今回のアンケートでは 2020 年度専門医試験受験者を対象とし、産婦人科の魅力や不安、産婦人科専攻が候補に挙がった時期や決定時期・理由などについて調査を行い明らかにした。
背景要因からはやや男性が少ないものの、例年と比較して大きな男女比の違いはなかった。また妊娠中または子を持ちながら専攻医研修に取り組む者が 101 人(34.6%)いたことからも、全国で柔軟な研修が行われていることがわかった。

産婦人科の魅力についてはやりがい・充実感(226 人 (77.4%))、領域が広い(133 人 (48.2%))、女性の一生に関わる(11 人 (39.7%))など産婦人科に特徴的な点を多くあげる者が多かった。一方、専攻研修前に感じていた不安は、人手不足については横ばいからわずかに増加(143 人(49.0%)⇒159 人 (54.5%))していたものの、当直の負担や精神的・体力的な過酷さ、訴訟の不安などは、研修後に解消される傾向であった。このことから、現在の医療現場においても産婦人科診療を通してやりがいや充実感を感じている者が多く、産婦人科について一般に抱かれる不安についてはその多くが研修後に解消されていると考えられる。一方で、現場では人手不足を感じる面もあり、学会や各医療機関においては 2024 年の医師働き方改革に向け人材の集約化や労働形態の見直しなどについて取り組んでいくことでそういった面も解消される可能性があると考えられた。

産婦人科専攻が候補に挙がった時期は、医学部 5～6 年生が最も多く(113 人(38.7%))、医学部 3～4 年生以前と回答した者も合計 96 人(32.9%)おり、より低学年から産婦人科が候補に挙がっている印象であった。候補に挙がったきっかけとしては周産期の臨床経験・座学が合計 45.2%と高く、次に家族・親戚・先輩の影響が合計 27.1%、婦人科の臨床経験・座学が合計 12.0%を占めており、臨床実習や講義などを通して産婦人科診療への興味を感じている者が多いことがわかった。

産婦人科専攻を決定した時期については、臨床研修中に産婦人科専攻を決定した者が約 7 割(199 人(68.1%))を占めており、前述の結果も併せて考えると医学部 5-6 年生で興味を持ち、臨床研修を行っていく中で産婦人科専攻を決定していく様子が窺われた。またほとんどの回答者(291 人(99.7%))が初期臨床研修中に産婦人科をローテートしたと答えており、臨床研修 1 年目において約 6 割(183 人(62.5%))、臨床研修 2 年目には約 9 割(272 人(93.4%))が産婦人科ローテートをしていた。

産婦人科専攻に寄与した理由は周産期(184 人(63.0%))・婦人科(141 人(48.2%))の臨床経験が多く、次いで先輩の影響(126 人(43.2%))を挙げる者も多かった。また産婦人科サマースクールを理由として挙げた者は 40 人(13.7%)おり、産婦人科サマースクールへの参加により全国の医学生・臨床研修医、先輩産婦人科医との交流、産婦人科診療体験を行うことができ、普段の診療では得られない産婦人科専攻に向けた決定要素を見出せる可能性があることが示唆された。産婦人科専攻の決定に最も影響した理由については、周産期の臨床経験(122 人(41.8%))に次いで先輩の影響(49 人 (16.8%))を挙げる者が多かったことからも、産婦人科の医療現場での経験を通して先輩医師との交流を行うことが産婦人科専攻のきっかけとなる可能性があることが示唆された。

以上

リクルートアンケートワーキンググループ
未来委員会　磯部真倫、末光徳匡
若手委員会　中野和俊、末光徳匡、小野寺洋平、長谷川瑛洋、前田 裕斗、
大須賀拓真、小椋淳平、小寺千聡、土田奈々枝、永瀬慶和